

2024 年度 個人研究実績・成果報告書

2025 年 4 月 16 日

所属	基盤教育機構	職名	准教授	氏 名	藤野 和樹
研究課題	大学体育バドミントン授業における競技経験別指導法の開発				
研究キーワード	技能上達，動作分析，主観的技能課題	当年度計画に対する達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた		
関連するSDGs項目	3. すべての人に健康と福祉を	4. 質の高い教育をみんなに	該当なし	該当なし	

1. 研究成果の概要

本研究の目的は、大学体育バドミントン授業受講者を対象に、オーバーヘッドストローク（OHS）技能と運動経験との関係を明らかにすることであった。この課題に主観的および客観的側面からアプローチするため、技能ループリックを用いた技能の自己評価と運動経験との関係、動作撮影に基づく動作水準と運動経験との関係を検討した。調査対象者は、首都圏にある C 大学のバドミントン授業履修者 882 名であった。H 検定の結果、自己評価による OHS 技能得点は、運動経験 5 水準（バドミントン、打具操作、球技種目、非球技種目、運動経験無）による違いが見出され、スマッシュにおいて、バドミントン群だけでなく打具操作群が非球技群と運動経験無群よりも有意に高かった。次に OHS インパクト時の手関節、肘関節、肩関節の各角度に基づく動作データを H 検定した結果、スマッシュ、クリア、ドロップのすべてで運動経験による差異が認められた。またその後の多重比較の結果、スマッシュではバドミントン群がすべての群よりも手関節および肘関節の角度が有意に小さく、運動経験無群はすべての群よりも肘関節および肩関節の角度に有意な差が認められた。結論として、バドミントンの OHS 技能の自己評価と動作水準は運動経験と関係することが明らかとなった。そのため、学生の主観的および客観的な技能特性と運動経験の関係を踏まえた授業展開が望まれる。

2. 著書・論文・学会発表等

（できるだけご記入ください。査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

バドミントンのオーバーヘッドストローク技能と運動経験との関係：大学体育授業受講者を対象に
大学体育スポーツ学研究 22 巻, p41-48.

【著書・論文（査読なし）】

【学会発表等】

日本バドミントン学会 第 8 回学会大会 多様性適応力を高める大学体育バドミントン授業の試み

3. 主な経費

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）